



1986年(昭和61年)
10月号(No. 496)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

- 北京国際スポーツ医学
術会議に参加して
田中壮佑……………(1)
- ウェストンの旅行免状
川村 宏……………(2)
- 海外の山……………(2)
- 「14 座目」
「天国・そこは四姑娘山」
バリデーションという思想
松丸秀夫……………(3)
- 報告……………(4)
- 海外委員会、科学研究委員会、
京都支部
- 図書紹介……………(5)
- 「吉阪隆正集」「オクサスとインダス
の間に」「百山百譜」「ガイドブック
三冊」
- 東西南北……………(7)
- ポーランド隊からの寄贈図書に
ついて 図書委員会……………(8)
- 会員名簿の正誤(4)……………(10)
- 会務報告・ルーム日誌・会員移動
お知らせ……………(11)
- カット/山本朋三郎・牧 潤一

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

北京国際スポーツ医学

学術会議に参加して

田中壮佑

第一回北京国際スポーツ医学学術会議(中国スポーツ医学学会主催)が昨年十一月二日から八日まで北京で開催されました。主要テーマは、(1)体力トレーニング(2)スポーツ外傷の診断・治療・予防(3)疲労(4)スポーツと年齢などで、なぜ私のところに招待状がとどいたのか疑問に思いますが秋の北京を旅できることを楽しみに参加いたしました。

会場となった友誼賓館は郊外にある北京最大のホテルで広い敷地に九つの中国式建物があり、北京ではめずらしく木立ちに恵まれた静かな会場でした。第一日目はホテルのメインホールで開会式が行なわれ北京医科大学 Qi Minyan

教授の挨拶につづいて各国専門家による特別講演が終日続き、日本からも筑波大学の池上晴夫教授、順天堂大学の黒田善雄教授が演壇に立ちました。二日目からは同じ敷地内にある中国科学研究所のシンポジウムホールで六会場に分かれて一般講演があり、とくに中国の人たちの意欲的な発言が目立ちました。演題総数二六二題、うち外国から六九題で日本からも二六題の発表がありました。

内容は多岐にわたり登山に関するものは数題でしたが、航空医学研究所・中国山岳協会の Li Shun-Ping 先生が「低圧室における低酸素適応性の評価と登山における実証」を発表なさいました。被験者十六名を対象に、急性高所暴露実験では血中酸素飽和度、心電図、心拍数、血圧、脳波などに一定の異常判定基準を設定し、七〇〇以上でも異常所見を示さなかった適応良好群三名と不良群十三名について検討していました。とくに血中酸素飽和度は両者間に優位差があり、心拍数や血圧においても差を認めました。また、実際の登山活動、登山中の心電図、登山前後の尿中コルチゾールにおいても両者はよく相関し、急性高所暴露実験結果で高所適性を判定できたと報告しました。池上教授から反論もありましたが興味あるものでした。私は「低酸素環境の脳機能におよぼす影響」について報告させていただきましたが、昨年の日本登山医学研究会で特別講演をして下さった Weng Qinghang (翁慶章) 先生が私に招待状を出して下さったことをこの時はじめて知りました。翁先生は今学会の



城塞部落カクベニ

最後の晩は鴨料理を囲み皆で肩を組み歌を歌って別れをおしめました。十八ヶ国、約四〇〇人のスポーツ医学関係者が北京に集まって話し合ったこと自体、意義あることに思えましたし、登山医学の分野でもスポーツ登山がますます盛んになっている現在、他のスポーツ医学関係者と接する機会を多くする必要を痛感いたしました。

帰る日の半日は天安門広場に面した歴史博物館で過ごしました。中国の長い歴史と偉大な文化に新たな感銘をうけるとともに、革命博物館では日中戦争の記録を目の前にし胸がつかまる思いでした。北京での一週間はあっという間に過ぎてしまいました。

お知らせ電話

234 六六五九

ウエストンの旅行免状

川村 宏

ウエストンの旅行免状があった！松本市の登山史研究家三井嘉雄氏からコピーを頂き、現物を見たいと三井氏をお誘いして天竜川畔の伊那時又を訪ねた。

旅行免状の「写し」を保存されていたのは、飯田市時又の伊原聰氏である。「外国人姓名留」と記された和綴じの一冊には、時又の伊原運漕店による明治二十二年（一八八九）八月から明治二十八年（一九一五）十月までの天竜川下りの外国人の旅行免状が毛筆で写されている。記載された外国人の総数は女性も含めて一三二人、ほかに付添人などとして日本人の名前も見える。

伊原運漕店は「丸文」の屋号で、江戸時代から天竜川の運漕業を行っていた。聰氏の祖父が当時の主人の弟で、旅行免状の写しの大半は祖父の筆跡だという。

『外国人姓名留』の中にウエストンの旅行免状が二通ある。明治二十四年（一九一五）の日本アルプス初訪と、明治二十六年（一九一三）五月の旅のものである。

第三三二二号 外国人旅行免状
国籍 英吉利

姓名 レウエレンド、タブリ

身分

寄留地名

旅行趣意

旅行先

及路筋

ユ、ウエストン氏

健康保養

神戸ヨリ汽車ニテ三河

ニ到リ夫ヨリ順路美濃

飛騨越中越後信濃上野

下野常陸下総武蔵上総

安房相模伊豆駿河甲斐

遠江経歴汽車ニテ神戸

二帰ル

旅行期限

二十四年七月十八日ヨ

リ三ヶ月

右ハ英国公使ノ保証ヲ

以前書掲載ノ場所ヘ旅

行致し度旨申立差許候

条道筋無故障相通可申

事

明治二十四年七月十八日

外務省 印

第二六九号 外国人旅行免状

国籍 英吉利

姓名 レウエレンド、タブリ

ユウエストン氏

寄留地名

旅行趣意

及路筋

病氣養生

神戸ヨリ淡路へ夫より

汽車ニテ姫路奈良京都

府名古屋ヲ経テ横浜ニ

到リ夫ヨリ順路武蔵安

海外の山

十四座目

ロツツエ（八五一一）から、もう間もなくその一報が入るかもしれない、と多くくヒマラヤニストが注目しているに違いない。

ラインホルト・メスナーの「八千峰全山無酸素登頂」を伝える一報にである。

「ヒマラヤのクライミングに興味をなくしつつあるんだ」と、昨秋精鋭アルピニストたちとの座談会で表明、波紋をなげかけた（八月月号会報参照）イタリアの「超人」は、やはり十四座のジャ

イアント全に登るといふ夢を捨てたわけではな

かった。九月二十六日、二人のイタリア人と共に

十三座目の八千峰、マカル（八四六三）に登頂、そのあと最後に残されたロツツエに向かっ

たのである。一昔前には考えられなかった「八千

峰ピーク総なめ」は、いよいよ秒読みに入った

といえるだろう。

エベレストに登られてから十一年後の一九六四年、最後の八千峰、シシヤパンマ（八〇一二）が中国隊によって登られたあと、ヒマラヤは

次の段階に入った。メスナーはその時代を受けて、「個のヒマラヤ」あるいは「自分のヒマラヤ」登

山を、強い主張とともにやっていたのである。

最初の八千峰は、一九七〇年六月二十七日、弟のギンターと登ったナンガ・パルバート（八

一二五）である。当時、メスナーは二十六歳だったことを考えると、以後十六年間に全ての八千

峰に登ることは、結果論からすれば決して無茶な企てではなかった。現在の登山の趨勢は、年に

二つか三つのジャイアントに攀じることでも充分可能としているからだ。

しかし、メスナーがやってきたことは、彼自身あちこちで主張している通り、ただ単にっぺんに登ることだけではない。酸素を使わず、単独、あるいはごく少数のアルパイン・スタイルで困難なルートを目指したのである。各国の第一線の登山家たちがこぞって志している登攀をあらゆる高峰を舞台に、この四十二歳になった不世出のクライマーは実行してきたのである。

メスナーがあまりに色々のことをやってしまったため、次に何をすればいいか戸惑っている、というのがヒマラヤ登山の現状といえるかもしれない。彼を「八千峰のピーク・ハンター」と決めつけ、記録主義者のレッテルを貼ろうとする人々も、実はそういう言い方でもしれないと新しい何かをやる気概が湧いてこないことだろう。

過去、ヒマラヤに限らず、これだけ激しい登攀をやリ、多くの成功と失敗を繰り返し、しかも常に着実に生還した登山家は、他にあまりいない。十四座登頂の報はまだ入らないが、これまでの登り方からいって、ロツツエのつべんに立ち、無事帰ってくるのは時間の問題だろう。それは矢張り凄じいまでの勝利だと思う。

「ヒマラヤに興味をなくした」というメスナーが、次に何をやるのか、少々早すぎるが、興味がある。おそらく、ヒマラヤほどに活躍できる場は見出せないのではなからうか。「人生には第二のアンナプルナがある」といった、エルゾーク流の美学もメスナーにはなんとなく似合わない。しかし、一方で何もしなくていい、ヒマラヤに飽きたのなら、さっさと「十四座目」を登ってのんびりしてはどうか、と言いたい気もする。

(江本嘉伸)

房上総下総常陸上野信濃
濃模伊豆駿河遠江経歴
前路神戸ニ帰ル
旅行期限
廿六年二月ヨリ六ヶ月

間
右ハ英国代理公使ノ保
証ヲ以テ前書掲載ノ場
所ヘ旅行致シ度旨申立
差許候条道筋無故障通
行セシムベキ事

明治廿六年二月九日

外務省 印

明治二十四年(一八九一)の旅
行免状からは明確な登山の意志が
読み取れるが、明治二十六年(一
八九三)のそれは奈良、京都、箱
根辺りへの観光旅行のための感
が深い。この年、ウェストンは二
人の友人と恵那山に登り、神坂峠
を越えて天竜川下りを楽しんだと
富士登山で五月の山行を締めく
くっている。だが、恵那山のある
美濃は免状に記載されていない。

また富士登山後の御殿場で旅行免
状の期限切れを警官に指摘されて
おり、免状に記された六ヶ月とい
う期間にも疑問が残る。明治二十
六年の春は、予定外の急な旅に古
い旅行免状を使ったものだろう。

当時、神戸や横浜などの居留地
に住んでいた一般の外国人は、そ
の周囲十里の「遊歩区域」外へ旅
行するのにこうした旅行免状を必
要とした。内地旅行の自由を認め
られていたのは公使、領事ら外交

官だけだった。旅行制限は、外国
人の自由な商業活動によって経済
体制が混乱することを恐れたため
であり、キリスト教の宣教を防止
する意味も含まれていた。

外交官やいわゆる「お雇い外
人」を除いて、旅行目的も健康保
持以外は許されなかった。この頃
はもう単なる名目に過ぎなくなっ
ていた様子も窺えるが、ウェスト
ンの旅行趣意が「健康保養、病氣
養生」となっているのはそのため
である。

この旅行免状の制度は、日本が
諸外国との不平等な関税率の改訂
に成功し、裁判権を取り戻した明
治三十二年(一八九九)の改正条
約施行まで続けられた。

バリデーション

という思想

松丸 秀夫

スポーツ用の下着が進歩して新
しいものが出現した。

登山用にも、ひと頃のように純
毛を下に着る時代ではなくなった
という人が多い。

然し、登山用衣服にはシビヤな
要求の必要を説く声は強い。人の
命にかかわることだとして、氷雨
に叩かれて、強風に当たる場合
や、強くこすられる条件などがい
われる。

だから、これらの評価には基礎
と実際の両面から、いろいろの規

海外の山

天国・そこは四姑娘山

塚本 幸子

老牛園子のキャンプから、もう三時間あまりに
もなるといふのに、エーデルワイスのカーペット
は、えんえんと続き、日陰にはまだ遠い。ふり返
ると四姑娘山連峯は、顔を雲でかくし別れを告げ
ていた。ふとわたしは、今まで天国にいたのでは
ないか——と思った。

万年雪におおわれたみごとな形の四姑娘山(六
二五〇メートル)の登山基地、日陰に入ったのは八月六
日であった。五時半すぎとはいえ、日は天に高く
菜の花の黄色がまぶしい。招待所前には、折り重
なるようにして大人も子供もわれわれを眺めてい
る。日の暮れるころ、隣の小学校の庭で子供達と
ゴムとびやパンダの折り紙をする。年のわりに体
の小さなチベットの子供達だが、敏捷で手先が器
用だった。

次の日、四姑娘山の西の谷、長坪溝をラマ教寺
院跡まで登った。菜の花畑の続く桃源境の散歩で
ある。道の傍らには百花乱咲き、牦牛がのんび
りとその花を食べている。一時間余り歩いた頃、
目の前に四姑娘山が青い空に顔を見せた。最初の
お目見えである。菜の花の黄金色に山の白い頂
き、深い青の空。「ああ、この旅の終着駅は、こ
こでもよい」と思う。ラマ寺院の廃墟からの四姑
娘山も美しく、廃墟のゴンパの中では、子山羊が
一匹なっていた。スケッチする友の傍にすわりこ
んでごきげんになる。そのうち、外から母山羊の
よぶ声がした。この寺院への道の途中で羊を放す
子供達にあった。中に少女がひ

とりいて小高い草の上に腰をお
ろしいざりばたで細い帯を織つ
ている。数本の木片をへいにし

て自然の白を主体に黒と赤を入れて、かなり複雑
な模様ができていく。腕白さかりの少年が羊の毛
を手で廻しながら紡いでいる。まるで天の川の織
女星を見る思いであった。

牦牛や馬に重い荷物をあずけてBCである老牛
園子へと尾根道をたどったのは八日、花の上にテ
ントを張るなど、とんでもないことなのに、われ
われの寝床は、エーデルワイスとフロウ草のじゅ
うたんの上となる。この朝は七時ごろようやく
明ける。テントや花の夜露が、ばしばしに凍っ
ている。陽のぼってその氷がとけはじめるときら
きらと光る。大海子から流れ下る豊かな清流は冷
たい。

九日は、朝食後昼すぎにかけて、花の道を四千
メートルまで高度順応のため登った。そして十
日、テントの数をへらして四千三百メートル、四姑
娘山直下の地へとキャンプをすめる。ここは草つき
の上端であるが、嬉しいことに、各種のリンドウ
がトリカブトやエーデルワイスとともに咲いてい
た。岩かげには、夢にみたブルーポピーが、あち
こちに姿を見せ、大きくひらいたやわらかい青の
花べんが、谷をあがる冷たい風にふるえていた。

十一日早朝、ねむれないままテントの外に出る
と空いっばいの星だ。北の空に流星を見る。四時
半起床。おかゆ一ぱいに紅茶とビスケット一まい
で六時出発。かい中電灯のあかりの中、足もとの
石の横にペンケイ草を見る。こんなところにもま
で花が――。

粘板岩のうき石をふみ、落石の音に肝を冷やし
ながら四五〇メートルのゴルの上に出たころは、もう
すっかり明るくなっていた。はるか南の空にミニ
ヤコングの姿が白くうかんではいる。ゴルからは、

海外の山

山をきれいにゴミは持ち帰ろう



「ヒラリー卿を囲む歓談の夕べ」で／撮影・広羽清

ヒラリー卿を囲む歓談の夕べ

海外委員会

格と試験が必要である。
吸水と汚濁に関するだけでも、少くとも熱力学的評価、屈曲試験、摩擦試験などは必要だろう。今までは熱力学的な検討が抜けていた。

それだけでなく、消費者に渡った製品が間違いない規格に合っている、或いは使用の目的に適している証拠が必要だ、とする考えがいろいろな分野で広がってきた。これをバリデーションという。

報告

専門的知識技術が甚しく洗練の方向に進んだ状態といえよう。だが極端な洗練には反対もあるもので、他の分野のことだが、昨年発展途上国のナイロビ会議で医薬品の洗練化に釘がさされた。

世界中に薬がゆきまぐらることの方が大切だということである。

洗練は進歩の方向ではあるが、基礎的な精神活動と合わない場合もある。登山の場合はどうであろう。

(科学研究委員会)

ヒラリー卿(サー・エドモンド)は、北海道札幌で開かれた「世界アドベンチャー・フェスティバル」に参加されるため、秘書のジューン・マングルー女史を伴い、ひさ方振りで来日された。前回の来日の際、現在の本会ルームにお招きして以来、八年目のことである。今回の「歓談の夕べ」は、八月九日(土)、六時半より日比谷公園内の松本楼で開かれたが、真夏の最中で、しかも週末であるにも拘らず、三十名の会員が

海外の山
もう土は見えない、岩をふんでの直登だ。少しピッチをあげれば息が苦しい。黙々と足を運ぶ時、八千級の山にアタックする山男の荒い息づかいを思いうかべていた。あれはK2の映画であったか。九時すぎ、この私も大姑娘山頂(五〇二

五〇二)に立っていた。目の前には、われわれの仲間二十五人と貫田、福岡両リーダーの笑顔、そして朝の陽に白く輝く四姑娘山があった。

海外の山

出席され、中でも西堀元会長、吉沢名誉会員、田口名誉会員等、旧知の方々はヒラリー卿と久闊を叙された。

「マイクなんか知らないわよ」と相変らずお若い、卿とは長年の知己である中村テル名誉会員が、よく通る張りのある声で、日英両語の通訳をされながら、巧みな司会で会を運ばれた。冒頭、会長代理として、山田副会長が歓迎の辞を英語で述べられ、本会のマナスル登頂三十周年にちなみ、当時のヒマラヤ黎明期における人類最大の夢であったエベレスト登頂の報に、如何に驚きと賛嘆をもつて接したかを語られた。続いてジャンパンが勢いよくあけられ、西堀元会長が同じく英語で乾杯の辞を述べられた。乾杯の後、今度はヒラリー卿が挨拶され、一九七〇年の初来日の際、終始お世話された吉沢名誉会員との思い出を通して、日本の印象を語られた。この後、各自歓談に移ったが、当夜はニューヨークランド大使館よりDr.ブラックストック参事官、インド大使館よりゴングリー一等書記官、ソ連大使館よりコマロフスキー参事官が参加された。Dr.ブラックスト

ック参事官、コマロフスキー参事官のご両名は、誠に達者な日本語で、またゴングリー一等書記官は、目もあでやかな美しいサリイ姿で、パーティーに花をそえられた。会の途中、卿とは最も親しい吉沢名誉会員がマイクの前に立たれ、一九七〇年、卿をご案内して廻った富山や高山で、山車や朝市などを見学したこと等々の憶い出話を英語で述べられた。

本夕の別のハイライトは、清野画伯がお見えになり、お酒や食事をされる暇もなく、終始、机の前に坐られ、次々に廻ってくるしき紙に筆を走らせ、素晴らしい絵を次から次えとお描きになったことだった。その絵入りのしき紙にサー

水河地形探索山行

科学研究委員会

中央アルプスの千畳敷カールや大関カールは、わが国に見られるウルム期水河の残した典型的な水河地形の一つである。その調査研究に永年携わってこられた大正大学有井琢磨教授に講師をお願いして、七月十二日(土)、十三日(日)

の二日間、千畳敷ロッジを足場に探索山行を行なうことになり、二十六名が集った。

生憎の梅雨で、終始ガスと雨と風に見舞われたが、上松から登ってくる会員や、数時間前現地に到着して遊歩道の傍にモレーンを確認

めようとする会員など様々であった。

定刻十六時からスライドを用いての講演が始まり、その気になって観察すればモレーンの丘を識別したり、削痕のある石を見つけることができるの説明に、一同、明日はこの目で氷河地形を確かめようとの期待に胸をふくらませた。また食堂に掲げられた大きなパノラマ写真によって、千疊敷カールや極楽平カールの臨場感溢れる説明もなされた。

夕食後は、偶々昨年当地を訪れた大井会員から、スライドを用いて雲の説明と、石井会員(氣象庁)持参の高層天気図による予報の解説とが行なわれたが、夜が更けるにつれ予報通り、雷を伴う集中豪雨の様相を呈してきた。

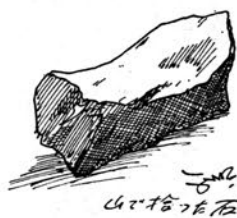
十三日は六時起床、六時半朝食、しかし相変らず雨は強く、風も加わってケープルは一時ストップになった。やがてケープルの山麓駅であるしらび平からのバス道路に落石が出、僅かにマイクロバスとジープが通れるだけだから、登山者は全員下山して欲しい、とのアナウンスがなされ、強風雨の中、宝剣小屋や駒頂上小屋からの登山者も続々とロッジに集って来た。

ケープルの運行再開とともに、私も下山させられたが、その間、雨中短時間ではあったが、現地についてモレーンの解説を聞

き、また瞬間的とはいえ、ガスが晴れて宝剣や千疊敷カールの全容を観察できたのは幸せであった。

講師の話によると、しらび平には左右両側から削られ、水平に置いた三角柱の両斜面が四五度近く、の斜度をもつモレーンの丘があるとのことだったので、ケープルを下車して雨中その見学に出かけた。ちょうど岩が雨に濡れ、削痕の検出にも絶好の条件であったが、しらび平に三方から流れ落ちる小沢がすべて増水し、連続、瀧となつて水しぶきを上げつつ豪々と流れ落ちる様は、幾条もの白布がはためいているようで、中々の壮観であった。

ジープとマイクロバスの連絡で松尾平に出、駒ヶ根に着くと未だ時間的に余裕があったので、三々



五々手打そばを賞味したり、比叡山と同じ標高にある名刹光前寺を訪れ、ヒカリゴケや幽邃な杉の巨木を探索したりして帰途についた。何時かもう一度天気の良い時



図書
紹介

吉阪隆正集

第四卷

吉阪隆正集刊行会

編集委員会編

吉阪さんは有名な、海外にもその名を知られている建築学の大家であつたから、この全集のほとんどの巻は本職のほうのものがほとんどだと思ふが、私は見せて頂いてないので、どんなものか知らない。

私が解説を頼まれて書いたのが彼の登山遠征をあつかったこの第一四巻であつて、岳人としての興味はこの巻だけといつていい、と言いきつてしまつたら、発行者はアタマにくるかもしれないが、事実だからしょうがない。

建築の人たちはこの巻をジャマあつかいにするかもしれないのだから、それぞれ好みの向きがちがつていて世の中はうまくコトが運ぶというものだ。

山岳会のメンバーはみんなそ

れぞれ、テンデバラバラの仕事をしており、ただ山が好きで一生やめられなかった、という点で同類になつてゐるわけだから、自分とはちがつた分野で、ちがつた才能の同類がどんなことをやつたかというのには、自分と比較するとおもしろいし、うらやましかつたりもするし、類似性のある人生内容にはちがいないので、何らかの意味でタメになる場合もあるだろう。

私は吉阪さんといつしよに山を歩いたことなどなかったし、チマタで酒をくみ交したときさえもない。それなのに友達であり、私の会費制結婚式には、アゴヒゲをヒラヒラさせて気さくにやつて来てくれ、何かしゃべつたんじゃないかと思ふが、記憶もしていない、そんないいかげんな付き合いなのだ。

そうそう、話はちがうが、この結婚式には深田久彌さんも来てくれて、色紙に「ザマア見やがれ」と書いてある。どういう意味を込めたのか永久のナゾだ。

吉阪さんはごくマジメで、本業のときは知らないが、いつもニコニコしてながめていてくれるというタイプ、私にとっては遠くに住んでいる兄貴という感じだった。この感じは山岳会の人たちにも通ずるものじゃないか。先輩後輩でもなく、行動を共にするでもな

く、この世の利害とはなんの關係もなく、それでいて、いやそれだからこそ、ハラさぐり合ひなどのまつたくない付き合いができることになるのだろう。先に生まれ、先にミマカつた岳友を、ろくすっぽ知らないにもかかわらず解説などやつてのけて、それでこの世の中はなんとなうまく進行するのだ。

山岳会の人たちって、みんなこんなものなんじゃないのかな。

(西丸震哉)

オカサスと

インダスの間に

—中央アジア探検行—

R・C・F・

ジョンバーク著

広島三朗訳

アンズの木立の下には、黄色いアンズの実が踏みつけなければ歩けないほど落ちてゐる。そして、桑の木とその実。風に揺れ動くピラミダルなボブラの樹。これらの木々の間には、粘土造りの粗末な家屋。裸足で走り回る子供達。だが、こんな小さな谷あいの集落を通り過ぎると、岩石と砂利の荒々しい谷が続く。やがて再び、山腹から流

節にまた訪れ、氷河地形を実地に確かめて見たいとの想いを抱きながら。

参加者 有井琢磨、石井恵美子、大井正一、奥野道治、小林碧、斎藤かつら、里見清子、沢井政信、高遠宏、高橋詢、富田郁夫、中垣淑子、中村あや、中村純二、松丸秀夫、丸茂キクエ、宮前淑子、他九名 (中村純二)

京都支部設立

記念山行

三月十五日、京都支部設立後、五月二十一日のポールド山岳会との交歓会に次いで、会員が集うのは二度目である。

支部の初めての山行として、五月二十四日、二十五日の両日、京都府下美山町の長老ヶ岳に登った。長老ヶ岳は京都の多くの登山家を育てた京都北山のほぼ中央にあり、標高は九一七だが山頂に一等三角点がある。晴れた日は丹波高原の山々から丹後半島や日本海まで見渡せ眺望は雄大である(五万分の一、四ツ谷、綾部)。

二十四日夕刻、美山町内久保にある民宿「森しげ」に集った会員二十九名は、いろりを囲み、宿の森夫妻が腕によりをかけて作られた山菜料理を頂きながら、おおいに飲み、おおいに語り合い新旧会員の親睦を深めた。小山貢会員のオペラの Aria から幕の油売りま

での、あまりの芸達者さにみな感心してしまい、早速宴会部長任命の一幕もあった。

民宿「森しげ」の森 茂明さんは、丹波の自然を愛するあまり京都市内からこの美山町に移り住んだ人である。ムラ人としてやっと許されるまでの十年間の苦心談を、最近「晴れて丹波の村人に」という題で出版された。溪流釣りの名人でもある。この日早速日本山岳会入会の申し込みを頂いた。

二十五日、当日参加者も含め計三十四名になった。大野より川谷まで車で入り仏主峠を経て頂上に立った(九時三十分出発、十二時頂上)。よく晴れて眺めも素晴らしい。乾杯のビールも「森しげ」特製の朴葉飯もいちだんと美味であった。

下山は同じ道を通るのは面白くないので、わざとルートはずして下る。支部会員には、植物や森林学の権威者が多く、下山の時は植物や樹木の研究実習が盛んであった。

参加者・(アイウエオ順) 秋野子弦、朝倉英子、荒木真弓、岩坪五郎、岩坪レイ子、上尾庄一郎、上原泰行、遠藤克昭、小川九三雄、小田孝、岡田茂久、大槻雅弘、久我良房、小山貢、小林直人、近藤薫、斎藤惇生、酒井敏明、坂井久光、四手井靖彦、清水一男、杉山イタル、須藤建志、高木志茂子、高島法男、幣内規男、

紹介落ちる山川の周辺に同じような集落が姿を現わす。細い谷筋の奥には、雪を被った尖峰が見え隠れしている。

一九三三年に英人探検家ションバーグ(一八八〇—一九五八年)は、オクサス河(アム・ダリヤ)とインダス河に挟まれた山岳地帯ヒンズークシユの谷を歩き、峠を越えて、この地の人と風物に接した。彼の紀行は、約五十年を経た今日でも色褪せることがない。この山岳地帯では、歳月はそれほどゆっくりと流れている。ギルギットやヤスーン、イシユコマン山地を経て、著者は剽悍な山岳民族の国、フンザに入る。フンザについては、その習慣や歴史も詳述されている。そして、フンザ川の支流チャプールサーン川の源頭の峠、イルシアード峠でこの紀行は終わっている。イルシアード峠を北へ乗越すと、オクサスの源流ワハン谷である。ヒンズークシユに興味を持っている人には、この古典的労作にぜひ目を通して欲しいと思う。訳者もこの地をこよなく愛している岳人であり、訳文もなおざりなところがなく、平易で読みやすいものに仕上がっている。なお文中、マークホルはオヴィス・ポリともいうと注がつけてあるが、オヴィス・ポリはアルガリと呼ばれ、同じウシ科であるが

百山百譜

小倉 厚著

昨年九月に「新北越雪譜物語」を著した小倉さんの相次ぐ作品のデビューである。毎日の勤めを有する環境の中にあつてその筆力と、物を書くことについての勤勉さには敬服させられる。しかも山をよんだ歌は、かなり以前から書きためたものであるにせよ、文章は百の山についてキツチリと二ページの内に書き上げられたものを数カ月で書き上げたというから、その構成員もたいしたものだと思う。当山岳会で「山日記」の編集を手がけたり、資料の整理やまとめを手がけてきた能力のしからしむるところかも知れない。この本は、自分の今までに登った百の山の素描、解説、紀行に加えて、必ず一首づつの歌に託してその感懐を結ぶという方法によっている。著作の題名からして、どうしても深田久弥の「日本百名山」と対比して見てしまいが、この「日本百名山」が、著者深田久弥の基準(品格、歴史、個性)により選びぬいた山について、その選定根拠を立証するかのようになり、かなりの味付けのこい文章のつめ合せになっているのに対し、この「百山百譜」はあっさりとしたお茶漬の

図書紹介

中尾宏、西川頼、古家邦文、三橋勉、森茂明、山口克、横田明男、吉村健次郎。
(美山町に住まれている会員番



ヒラリー卿

松本市で講演

ヒラリー卿は八月九日の松本楼での海外委主催歓迎会のあと、松本市に向かい、同市内のホテルで約三百五十人の聴衆を前に「私とヒマラヤ」と題して講演を行なった。これは松本市で行なつた国際アルピニスト大会関連行事の一つとして行なわれたもの。

開会冒頭、通訳の中村テル氏、ヒラリー卿を紹介した吉沢一郎氏との打ち解けたやりとりで会場の緊張した雰囲気は和み、エベレスト登頂から現在ネパールで行なっている病院建設、学校建設などの奉仕活動に至るまで、ヒラリー卿のスライドを使った講演には全聴衆が知らず知らず引き込まれてい

号一四八四の谷博さんは手足が不自由にもかかわらず「森しげ」に來られ、会員を励まされた。
(文責・上原泰行)

つたようである。

テンジン・

ノルゲイ氏死去

エベレストに初登頂し、その後もインドの国立登山学校(HMI)の校長として、一九七六年まで後進の指導に貢献されたシエルパのテンジン・ノルゲイ氏は、五月九日、ダージリンにおいて肺疾患のため死去された。享年七十二歳。本会では、今西会長ならびに、親しかった三田幸夫氏の名で弔電を送り、弔意を表した。

なお今西会長とともに一九五三年秋アンナプルナで活躍し、その後、HMIの教官をしていたシエルパのダナンギャル氏も昨年九月十二日、六十五歳で死去。同じくHMIのインストラクターをしていたバサン・テンバ氏も昨年九月十七日相次いで死去。享年五十二歳だった。

深田久弥氏ご夫妻

の筆跡を眺めて

田畑 真一

私の書棚のなかに『山岳遍歴』という本がある。これはいわずと

図書紹介
味であり、適度の塩味の効いた、タラコか、塩鮭の切身の役を一山一首の歌が果しており、ほどよい味加減となっている。著者らしいさりげない淡々とした文ではあるが、やはり数多くの山をそれぞれに情感をこめて登った人にしてはじめて書くことが出来る内容ではないかと思う。ただ惜しむらくは、この本の真髓ともいべき山への歌の一首が、同活字で必ず文の最後の一行におさまっているのだ。せめてもう少し活字を大きくするか、字体を変えるかの工夫が欲しかったと思う。ともあれ、これは「小倉百人一首」ならぬ「小倉百山一首」である。読者にとり、自分自身のそれぞれの山の印象に照しながらの百譜の味わいや如何に……

昭和六十一年六月三十日
岳書房刊 定価一八〇〇円

知れた深田久弥氏の山についての随想集である。私が愛蔵することの本は著者署名入り本である。それで見返しの赤いラシヤ紙には「田畑真一様 一八六七年十二月一日 深田久弥」と書かれている。それも黒インクのボールペンで筆圧強く書かれている。赤と黒のコントラストが鮮やかに目にうつる。きのう、おととい、いや今さっき書

ガイドブック

三 冊

(小塩丘平)

①『日本百名湯(上)・(下)』(美坂哲男著、武藤昭写真、一九八六年四月十日、山と溪谷社刊、各二〇〇〇円)
日本国内の温泉二千湯入湯記録達成を記念して、北の知床から南は屋久島まで山のいで湯百ヶ所を美しい写真と共に紹介。交通、登山案内などのデータ付。(上)は北海道・東北・関東編、(下)は中部・西日本編となっている。

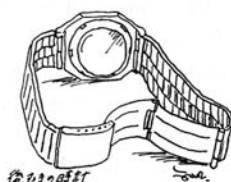
②『上州武尊山』(岡田敏夫著、昭和六十年十二月二十五日、東京新聞出版局刊、一五〇〇円)
山岳信仰の歴史を秘めた上州武尊山を、沢、積雪期、夏山、民俗(伝説・自然・人)の四章に分けて紹介。特に沢の詳細なルート図は、沢登りファンにとっては好個のガイドである。

かれたばかりのように生々しくみえるのである。時に心静かに眺めるにつけ、いつもそのようにみえるのである。深田氏が今なお健康在なり、の錯覚すら感じることがある。

ところでこの本の隣りに、一九七一年版の日本山岳会の『会員名簿』が収められている。両書は並んでいるというよりも仲良く寄り添っ

③『近江湖北の山』(山本武人著、昭和六十年十月六日、ナカニシヤ出版刊、二〇〇〇円)
琵琶湖の北に連なる山々は最高峰の伊吹山でさへ一三七七メートルとさして高い山とは言えないが、冬期は豪雪地帯となり、かなりの覚悟を持って入山しなければならぬ山々へと変貌する。春夏秋冬それぞれ異なった趣を持った三十四の山々を村人や歴史とのかかわりを織り込んで紹介。

(泉 久恵)



図書紹介

ているかのようにみえるのである。すでに古い名簿ではあるが、決して処分などはできない。なぜか。それは名簿の見返しのところ「六十八才 なほ惜しまるゝ冬の鵬 深田志げ子」の一条が書かれているからである。深田志げ子とは、いうまでもなく深田氏のご令閨である。これは昭和四十六年十二月四日の日本山岳会年次晩

餐会の席でご令閨が署名してくださったものである。今にして思い起こせば、深田氏が逝かれたその年の年次晩餐会である。当時、志げ子未亡人にしてみれば、今なお愛惜の情、切々としたご心境であられたに違いない。それで「なほ惜しまるゝ冬の鵲」の句は、深田氏への全身全霊をこめられたご供養の句でもあったのだと思う。これも白上質紙に黒インクのコントラストが目に見え、鮮やかである。その流麗なご筆跡を拝するにつけ、今しがた書かれたばかりの思いをもつ。それも眺めるたびにである。やはり、志げ子夫人ご健在なりの錯覚を感じることがある。

山村正光氏の『車窓の山旅』

中央線から見える山』のなかには、深田氏をしのぶ心情があまりところなく吐露されていて、「茅ヶ岳。この山は私にとって終生、忘れることはできない。ちょうど十三年前、山の作家深田久弥先生を眼前で失った山だからである」とみえている。また「その後、志げ子未亡人、ご家族、友人らの一周忌登山」とみえている。後文には「そして志げ子夫人も逝った」ともしたためられている。これらを味読するにつけ、あるべき方がすでないことに私も限りなくむなししく思うことがある。しかし、先述のふたつの書物に現われたご夫妻は確実にご健在である。そして私の思い出のなかにも生き続け

ポーランド隊からの寄贈図書について

図書委員会

先般来日したポーランド山岳会のザヴァダ隊長から、同山岳会の機関誌とヒマラヤに関する本が島田巽名誉会員（当委員会顧問）の手を経て本会に贈られました。このヒマラヤに関する本についての図書紹介文が水野勉会員を通してユゼフ・ヌィカ氏より送られて参りましたので、以下に掲載します。

今回おくれた "Na szczytach Himalajów (ヒマラヤの頂上へ)" の著者は、山の地形、ヒマラヤの歴史についての専門家、ズビクニェフ・コヴァレフスキ及び幾つかの遠征隊長を務めたヤヌシ・クルチャブで、出版社は、ワルシャワのスポーツ・イ・ツリスティカ（スポーツと観光）社。定価は日本円にして約 530 円（1 ズウォティは約 1 円）。ポーランドでは 25000 部が数日で売り切れたという。このたび本会図書室に納められたこの本には、来日したザヴァダ隊長らのサインが書き込まれてある。

Zbigniew Kowalewski and Janusz Kurczab :
Na szczytach Himalajów

Publishing house "Sport i Turystyka", Warszawa 1983; 462 pages of text with 20 maps and plans. 180 photographs on separate pages. Price 520 zł.

Expeditions reports in book shape are published in abundance and somebody gets into trouble to read them all. But complex compendia, taken on the broad basis, are very rare because it is not easy to work the way through the jungle of the Himalayan information, growing year by year. "Na szczytach Himalajów"—On the Summits of the Himalaya—is such rare book. The authors are renowned authorities: Kurczab, leader of several expeditions, Kowalewski—mountain topographer and Himalayan historical researcher. Their work unites the study of geography and history with wide mountaineering practice.

The book is divided into several parts. After introductory essays (geography of the great Himalayan system, organization of expeditions, history of exploration, total 40 pages) there are 14 chapters devoted to the 14 eight-thousanders (260 pages). The third section contains 20 chapters (over 50 pages) presenting the "high seven-thousanders" from Annapurna II to Annapurna IV. Part 4 (15 pages) contains a selection of eight lower peaks of special importance for the development of the mountaineering in the Himalaya-Karakorum range (Mustagh Tower, Jannu, Changabang and others). The final section of the book is devoted to the activity of women in world's highest mountains. There are also two comprehensive appendices including a wide Himalayan bibliography (132 items) and a complete gazetteer of 330 climbed and unclimbed eight- and seven-thousander with main first-ascent data.

Both authors are far from being national snobs and their book succeeds outstandingly in presenting exact geographical and historical information in a nearly faultless, highly clear and readable style. Likewise the numerous photographs—most of them printed for the first time—are of great interest.

Though written in Polish the book has international significance. Owing to concentrated factual information and the instructive summaries it can be useful to foreign readers, even those who are unfamiliar with Slavic languages. The first edition was in Poland a great publishing success: 25,000 copies were disposed during few days. In the meantime the authors brought the information up to date and the publishing house "Sport i Turystyka" is preparing a new carefully complemented edition. The book is certainly an ideal reference source and an extremely welcome addition to anybody's high mountain library. It also should appear in foreign languages—climbers interested in keeping up with Himalayan mountaineering are not only in Poland.

Józef Nyka

ていられる。

十年続いた

「花と氷河」の山旅

坂倉登喜子

私がヒマラヤのランタン谷のエーデルワイスを探索したのが、去る昭和五十年でしたが、その翌年の五十二年に、JTBの知人から、「ヒマラヤのエーデルワイスも見たことだし、今度は本場のエーデルワイスを見に行くプランは如何ですか」とのお誘いを受けて、第一回ヨーロッパ・アルパイン・ツアーを催行してから、各地

を歩き早くも十回目を迎えました。

第十回目の今年は去る八月六日より十七日まで十二日間、五十四名の大勢で特別企画の新コースの山や峠を歩きました。

今年はツエルマツトとミューレンに各四泊し、ここを基地に三回一五山のオーバートホルンの岩峰を踏み、新しいエーデルワイスの生育地も発見できて歓声をあげました。

ミューレンからエッシーネン湖へ越える二六一二のゼフィネンフルグ峠も登りごたえのある花の多いコースで、牧場小屋で飲んだ

しぼりたてのミルクは、とても美味しく、峠歩きの影響を深めました。モンテローザ氷河をトラバースした日は、雷雨にあいビデオを持った人が四人いて、とても恐ろしかったそうでしたが、その反動で後半素晴らしい快晴が続きました。懐しのミューレンの朝な夕な

の情景は何度行っても素晴らしく、今年は二度、三度と参加された常連メンバーたちとのあけくれは、最高に楽しいものでした。

今年はファミリー三組、新婚さん一組、年令層も十代から七十八歳まで幅広く、それだけにABC班と分けて安全に無理の無いコー

スを楽しく歩いて頂きました。第一回に歩いたフィルストコースを今年は逆に、シーニゲブラッテから健脚者のみに限定して快適に縦走し、第十回目として、今までと違い少しハードな山行でしたが、全員無事に帰国しました。

藤江幾太郎・チャリティ展

●12月8日(月)～13日(土) 11時～19時(最終日17時)

●日本橋アートプラザ 中央区日本橋2-1-18 電話 274-0892

地下鉄・日本橋下車2分、東京駅5分。

※ネパールへ小さい善意を届けるため、たたら同人展の一角で……色紙・淡彩スケッチ等。

会務報告

七月理事会

7月9日午後6時30分

場所 本会ルーム

出席者 今西会長、山田、大塚副

会長、鳴原、橋本、大橋、松永、

浜口、梅野、高遠、鈴木、新井、

岡沢、太田、平井、絹川、関塚各

理事、山本監事、松田、宮下、中

村各評議員

委任 大森理事

審議事項 なし

報告事項

◎事務職員高橋美津栄さん退職予

定による補充採用について 未定

◎山岳絵画展について

「近代絵画にみる日本の山・名作展」を朝日新聞社と共催で、八月二十八日～九月九日(上野松坂屋、九月十八日～九月二十三日(大阪松坂屋、十月二十一日～十一月三日(愛知県文化会館美術館)に開催する。

◎支部懇談会について 今年度の事業として計画されている九州地域における支部懇談会について、担当する宮崎支部より開催案が提出された。「日本山岳会九州山の集い(みやざき)」として十一月二日～三日に、宮崎県西臼杵郡高千穂町で行なう。

◎委員会報告

◎国際アルピニスト大会について 八月二十日～二十二日、松本市で開催

◎三国合同登山関係経過報告

5日(火) 婦人懇談会
7日(木) 山研委
8日(金) 科学研究委
25日(月) 総務委
26日(火) 三国登山打ち合せ

ルーム日誌

八月

今月の来室者123名

会費移動

退会

3569 木村 利雄

7997 河上 紘子

訃報

金坂一郎氏

(会員番号三〇八三番)

本会監事 金坂一郎氏は、七月十九日午前零時三十五分、入院先の浜松市、聖隷三方原病院にて、肺ガンのため逝去されました。

享年六十六歳。葬儀・告別式は、七月二十六日午後二時より、横浜市港北区の富士記念館・富士霊廟でおこなわれたが、本会からは、大塚副会長、三田、島田、小原、田口、浜野、望月、織内各名誉会員のほか、役員、委員はじめ故人を偲んで会員多数が参列して弔意を表した。

氏は、昭和二十七年に理事就任。以後理事・常務理事十二年、常任評議員七年、監事二年を

つとめられるなど、長期間に亘り、会務に尽力され、理事在任中は、山日記編集、国体登山、学生部指導、渉外、研究等を担当された他、昭和三十三年秋には、本会ヒマルチュリ登山隊の偵察隊長もつとめられた。

昨年は、高所登山委員会委員長、遭難対策委員会委員長、図書委員会顧問として後進の指導に当られ、物故時は、文部省登山研修所運営委員もつとめられていた。

氏はこのように、登山界にとって多方面で活躍されたが、中でも、「確保論」、「雪崩」についての研究は特筆すべき業績であった。

氏にとつての最後の山行は、昨年六月の創立八十周年記念、越後ブロックの八海山登山であったが、以後再び元気な姿を見せることはなかった。

本会は、ここに謹んで哀悼の意を表する次第である。

[会員名簿(1985)の正誤表(4)]

昨年発行しました会員名簿に誤記、脱落、退会者、二重掲載等がありました。正誤表をまとめましたので、お手数ですがご訂正願います。なお、住所、氏名等の変更については名簿発行後の会報に掲載されています。誤りや脱落していた方には大変ご迷惑をかけました。お詫び申し上げます。

(総務担当理事 高遠 宏)

頁	行	誤	正
16	14	足立敏則	足達敏則
131	16	平岡年麗	平尾年麗

支部名脱落により追加

頁	行	氏 名	支 部
18	下より 6	浅野新 一	岩手
40	下より 3	大久保義彦	山形
44	上より 10	大橋克也	山形
46	上より 2	岡部みち子	山形
49	上より 3	加賀賀勝	岩手
76	下より 1	佐藤英一郎	福島
77	下より 6	三瓶泰弘	福島
78	上より 1	斉藤清言	山形
87	上より 11	菅原久米蔵	山形
87	上より 13	菅原省司	山形
89	上より 11	鈴木千定	福島
89	上より 13	鈴木美琢	福島
101	上より 7	武田敏敏	秋田
107	上より 14	富樫正次	山形
126	下より 7	畠山秋稔	秋田
134	下より 4	田浦一	秋田
149	上より 11	三浦富一郎	福島
151	上より 6	水沢伸	山形
158	下より 11	桃井伸	福島

退会、不明、死亡、除籍、二重掲載等により削除するもの

頁	行	削 除	頁	行	削 除
15	下より 13	安部泰夫……	87	上より 5	吹田佳晴……
20	上より 3	荒木 薫……	100	上より 9	竹内克雄……
29	下より 3	今井忠良……	102	上より 5	谷村文平……
30	下より 12	岩佐康夫……	107	上より 13	外山定男……
33	下より 2	鶴木 洋……	134	上より 5	深堀鉄男……
35	上より 4	江口義夫……	144	上より 16	増淵昭治……
60	上より 2	木村 肅……	146	下より 14	松橋秀次……
70	上より 11	小林久雄……	159	下より 3	森本勲夫……
84	上より 4	島 澄夫……	171	下より 4	米田文郎……
84	下より 3	清水洋司……	175	上より 3	渡辺雅夫……
85	上より 3	清水公二……			

栄光の時代を語り継ぐ幻の名書
遂に邦訳。

スイス山岳研究財団編

MOUNTAIN WORLD

マウンテン・ワールド
総19巻(本巻17巻・別巻2巻)

小学館

詳しい資料を差し上げます。

〒101東京都千代田区一ツ橋2-3-1

小学館宣伝部「マウンテン・ワールド」係までおハガキで。

第11期
15巻〜17巻(1964〜1969)
別巻・クロニク・ヒマラヤ / クロニク・ヒマラヤ II
全5巻 / 昭和62年秋刊行予定

第10期
1巻〜7巻(1946〜1952)
全7巻 / 昭和63年秋刊行予定

第1期
8巻〜14巻(1953〜1963)
全7巻 昭和62年1月刊行予定
第1期7巻セット予価175,000円
B5判(257ミリ×182ミリ) / 平均頁310頁 / 平均写真頁64頁
日本語版監修委員…近藤 寧(早稲田大学教授)
福田宏年(中央大学教授) 望月達夫(日本山岳会名誉会員)
薬師義美(京都大谷高校教授) 吉沢一郎(翻訳家、前日本山岳会副会長)
翻訳・田村協子 / 山本健二郎 / 倉知 敬 / 新島義昭 / 吉永定雄ほか

いま踏み締める、山の原点。

世界の山岳史を飾る栄光、偉業の数々。

スイス山岳研究財団が四半世紀にわたり発行し続けた
珠玉の記録、紀行集が遂に日本語版でよみがえります。

別巻にはマルセル・クルツの名作

「クロニク・ヒマラヤ」も完全収載。どうぞ、期待ください。

第1期

予約受付中!



234-6659

この電話で
もお知らせ
しています

◎信濃支部創立

四〇周年記念山行

当支部創立四〇年の記念山行を、山の温泉中房に集い、昔から信濃富士と安曇の人々に親しまれた有明山(二二六三)で行ないます。会員各位のご参加をお待ちしております。

日時 十一月八日(土)、九日(日)

場所 中房温泉に八日午後五時までに集合、六時より懇親会。九日、有明山に登り、下山して現地解散。なお、有明駅から中房まで松本電鉄の連絡バスはありませんので、タクシーをご利用下さい(運賃片道約四千五百円)。

参加費 七千円

申込締切 十月三十一日まで

〒三九九一八二 長野県南安曇郡

豊科町高家

中野和郎 (☎ 0263-72-3345)

信濃支部

*

第二十九回

◎紅葉会案内(静岡)

秋たけなわの南アルプス南部の大井川、寸又川にもみじをたずねます。

日時 昭和六十一年十一月八日(土) 九日(日)

宿泊 SL列車の運転で有名な大井川鉄道経営の寸又(すまた)温泉「山の家」

集合場所・時間 大井川鉄道「金谷駅」前(東海道線金谷駅下車)

十二時五十分までに集合。十三時発千頭行きに団体乗車しますから遅れないように早めにお集まり下さい。

行事 十一月八日 午後三時ころ寸又温泉着午後五時より「山の家」にて懇親会開催。

九日朝八時朝食後、現地解散。(昼食弁当は用意します)

解散後の行程は(A) 沢口山登山(B) 寸又川探勝(C) 井川富士見峠―静岡 等があります。

会費 一〇、〇〇〇円
解散後の温泉からの帰路交通費は自己負担です。金谷駅までの運賃約二二五〇円、又は井川經由静岡駅まで約二七五〇円。

申込 郵便振替による会費振込をもって正式の申込とします。宿泊人員の限度が四〇名のため満員になり次第締め切らせて頂きます。

振替口座番号ならびに連絡先 郵便振替口座 名古屋九一五〇八五六 日本山岳会静岡支部紅葉会(山本朋三郎)宛。

*

第三回ヒマラヤの

エコロジ―(シンポジウム)

―ヒマラヤの自然の保護と利用開発との調和―

日時 昭和六十一年十一月十五日(土)

受付 午後〇時三〇分より
開会 午後一時三〇分より

シンポジウム

基調報告 川喜多二郎氏

提案者 新津晃一氏(国際基督教大学)

他、信州大学、千葉大学等のヒマラ

◎凍傷の予防

と対策・講演会

日時 十一月二十八日(金)

講師 金田正樹先生

東横病院・整形外科

最近登山道具の開発には、めざましいものがある。中でも寒さから身を守る道具の開発は、素晴らしい。しかし立派な装備をしたからといって、それで充分とはいえない。道具だては立派でも、使用する側に十分な知識がないと、かえって致命的な傷を負うことになりかねない。

最近国内外の山行を問わず、凍傷を受け不幸にも手足の指を切断せねばならない事故が多い。今回

ヤ生態学調査隊関係者に交渉中

会場 東京都教育会館三階会議室

地下鉄東西線「神楽坂」下車、神楽坂口を出て左側交差点を左折、突き当たり赤城神社の右隣(徒歩二分)

会費 五〇〇円(会場費、資料費)

なお、シンポジウム終了(午後五時三〇分)後、同じ会場で懇親会を開きます(会費三千円)。ふるってご参加下さい。

主催(社) 日本山岳会(科学研究委員会)

(自然保護委員会)

(社) 日本山岳協会

※出席ご希望の方は日本山岳会事務局まで、はがき又は電話でお申し込み下さい。

◎会員懇談会

日時と場所 十一月十四日(金) 午後七時よりルームにて

「東京農大コンロン七二六七峰登山隊報告会」

講師 早坂会員及び織内名誉会員

なお九月十六日(火)の会員懇談会では開催時間を誤ってお知らせし、ご出席の皆様にたいへんご迷惑をおかけ致しました。この場を借り深くお詫び申し上げます。

海外委員会・総務委員会

昭和六十一年十月二十日発行

100 東京都千代田区四番町五〇四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 今 西 寿 雄

編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京(291) 四四三三

振替口座 東京三〇四八二九番

東京都港区六本木三ノ一三〇

印刷所

株式会社 技報堂